

対人場面における認知の確信度と不安・怒りの関係性

CONFIDENCE IN ONE'S THEORY OF MIND AND NEGATIVE EMCONFIDENCE IN ONE'S THEORY OF MIND AND NEGATIVE EMTION CONTINGENT TO INTERPERSONAL COGNITION.

藤原 由佳
Yuka FUJIWARA

問題と目的

心の理論

他者の意図や目的・状態・信念を推測することが人間関係を築くために必要であり、その能力は心の理論と名づけられている(Theory of Mind, 以下 ToM と略: Premack, & Woodruff, 1978)。ToM に関する研究は主に幼児期から児童期までを対象としたものが多く、健常児は 4 歳頃から一人の人物の信念を問う課題「一次誤信念課題」の達成が可能になるとされ、人物 A の信念について考えている人物 B の信念を問う課題は「二次誤信念課題」と言われ、この課題は 9~10 歳頃達成できるとされている(藤野・森脇・神井・渡辺・椎木, 2013)。一方、Baron-Cohen, Leslie, & Frith(1985)の研究では、自閉症スペクトラム障害(Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD と略)の幼児は、健常児と同年齢であっても、ToM の確立が健常児と比べて遅いことが判明し、ASD において ToM の障害があるという仮説が提唱されている(藤野・森脇・神井・渡辺・椎木, 2013)。この仮説から ASD 傾向を持つ者は、他者の信念・意図などの推測が難しいために、人間関係の構築が難しいと考えられている(藤野・森脇・神井・渡辺・椎木, 2013)。従来の ToM に関する研究は、上記のように幼児から児童期までを対象とされたものがほとんどであったが、2016 年以降は青年期を対象としたインタビュー形式の ToM 課題(Bosacki, 2000; 辻・山崎・藤原, 2016)や高齢者の介護抵抗と ToM の関係(新田, 2016)等、より幅広い年代での ToM に関する研究も行われるようになってきている。

対人認知

人間関係の構築にあたっては、対人認知も影響を与えており、対人認知に関する研究では、対人不安についていくつか認知行動モデルが提唱されている。その中でも代表的なモデルは自己呈示理論がある。自己呈示とは、自分が社会的に認められようと他人からの印象を操作しようとする試みの事で、Schlenker & Leary(1982)は理論を踏まえて、対人不安とは自分が他人にある印象を与えようと動機づけられているが、自己呈示の成功可能性が低いと感じた時に生じる不安が対人不安であると仮定している。また、相澤(2014)は対人不安が強い人は対人場面において他人の意図・行動を推測した時、自分にとって否定的なものや驚異的なものと認知しやすいことを指摘しており、このことについては多くの研究でも支持されているとレビューしている。しかし、同時に相澤(2014)は論文の中で対人不安における認知特性は、上記のような広義な定義のせいで様々な認知や解釈が含まれてしまうため。すべての認知・解釈が対人不安に関連するのかが疑問が残る事と多様な解釈が出来てしまうような現実の対人場面では偏った認知判断になる可能性があるとしている。その中で、相澤(2011)は対人場面において、自分の行動を他者から何かし

ら阻害されてしまった場合、その他者の行動の意図は敵意から生じていると認知することを「敵意帰属」といい、この認知は対人場面での他者に対する攻撃性との関連で研究が多くなされてきたとしている。逆に、対人場面において自分の行動が他者からなにかしら阻害された場合、それは自分が嫌われた・避けられたと認知する「嫌悪判断」についても検討が必要と考え、特定場面での他者の行為に対するネガティブな感情(不安・怒り)を、相澤(2011)が考案した場面想定法を用いて研究を行っている。その結果、対人場面で生じるネガティブな認知判断に、敵意帰属と嫌悪判断の両方がみられることが示唆された。そして相澤(2014)は青年期の対人恐怖傾向と嫌悪判断・敵意帰属の関係を検討する研究を行い、嫌悪判断と対人恐怖には正の相関がみられ、敵意帰属は関係がみられなかったが、嫌悪判断と敵意帰属には正の相関がみられたので間接的には影響している可能性が考えられるとした。

心の理論と対人認知の関係

以上のように対人場面における認知や他者の意図や目的・状態・信念の理解は社会心理学、発達心理学の両方から個々に検討や研究が行われてきているが、互いの関係性について検討されている論文は見当たらない。また、従来の ToM 課題や新しく作成されてきている ToM 課題どちらも他者の意図・心情に対して「Yes/No」で回答し評価する課題になっており、回答への確信度(自分自身の回答に対する自信)は調べることが出来ない。その結果、高機能 ASD 者や青年期以降の ASD 者であった場合、ToM 課題を達成したとしても、回答への確信度が低いために日常生活に適応が出来ない場合や、回答内容がエラーだが確信度が高すぎるために、周囲の家族や支援者の支援・言動の意図を正しく読み取ることが出来ず、社会生活で孤立してしまう等の日常生活での困難さを検出することが出来ないケースがあるのではないかとと思われる。

このような観点で考えると、相手の意図等に関して明らかな正答が存在するような課題は、ToM の成立を調べるものとして有用であるとしても、成人に関する臨床心理的観点では、定型発達者であっても相手の意図や感情の推測(社会的認知)についてかならずしも確信を持っていないような微妙な社会的文脈における判断に係る検査が必要ではないかと思われる。推測が正しいかどうかにかかわらず、それへの確信がなさすぎる、あるいは強すぎることを検討できるような課題が必要ではないか。そこで本研究では通常の ToM 課題ではなく、辻ら(2016)が作成した日本語版 ToM インタビュー課題を参考に質問紙形式の ToM 形式課題を作成し、その答えに関する確信度も答えるようにした。そして、相澤(2011; 2014)が考案した特定場面においての行為者の意図を推測し、自分の感情を測定する場面想定法も使い、ToM 形式課題の確信度との相互関係を調査することを目的に研究を行った。

確信度の評定過程については、様々な理論がある(妻藤, 2011; 2014)が、当研究では特定の理論に基づくわけではなく、単に他者の内面推測に対する確信の強さを表す測定値として扱うため、臨床的応用の観点では評定過程まで考慮する必要はないと思われる。

まず辻ら(2016)が日本語訳した ToM インタビュー課題「女の子とブランコ」を参考に基本的な構造は同様のものを作成した。ただし、このストーリーには次のような疑問点があり、これらは踏襲しないことにした。辻ら(2016)ではストーリー中の中心人物が、近寄ってくる 2 人の周辺人物の様子を、その前から見ていたこと、および近寄り始めてから、周辺人物の意図は何かと考えているというような文章も入っている。つまり、彼らの課題の中には、登場人物の内面の記述も入っており、これは現実場面で、この 3 人の様子を見ている観察者の視点そのものではない。今回の研究では観察者視点の記述に近づけるため、できるだけ客観的行動記述になるようにした。さらに、辻ら(2016)では登場人物らの中に過去の人間関係の背景がありそうな記述になっており、今回はそこも変更し公園で見たことはあるが話したことはないということにした。ただし、この記述があると、純粋な行動記述のみではなくなるが、元々親しい関係ではないという条件設定を伝えるためにこの一文は付加した。しかしこの一文であれば、様子を見ている人(観察者つまりこの課題の回答者)としても、挨拶もしないなどから少なくとも他の場面で知っている相手ではなさそうだという推測はできること、また内面に踏み込んだ記述ではないので、これは入れることにした。このようにして、文章全体を新たに作成し、結果的に文章は半分強の長さになっている。辻ら (2016) は登場人物が子どもである 1 課題のみを用いているが、このような方針で、登場人物と大学生である回答者の年齢関係を操作して、複数の課題を作成した。これらを ToM 形式課題とし、回答者は観察者視点で登場人物の内面推測を行う。

また場面想定法では、回答者自身が当事者としてある状況に遭遇したという文章を読んで、回答者が感じる怒り・不安を評定する。相澤(2011)を参考に新たにストーリーを作成したが、これらも ToM 形式課題と同様に、回答者との年齢関係が異なる複数のストーリーとした。

予備調査

ToM 形式課題と場面想定法を新たに作成するにあたり、課題内容や回答時間の検討を行うために予備調査を行った。まず他者理解についての確信の持ちやすさを調べるための ToM 形式課題については、前述したように辻ら(2016)が使用した日本語版 ToM インタビュー課題を参考に、同じようなストーリー展開の課題を 6 課題作成した。作成時の方針として、登場人物を中心人物と周辺人物と定義し、中心人物はストーリー上の主人公の役割を担う存在、周辺人物は中心人物と接触を持とうとする存在とし、課題によって年齢の幅を作る事と中心人物と周辺人物の関係性の強さも幅を作るように作成した。質問紙の構成については、「中心人物の内面推測」、「周辺人物の内面推測」が自由記述、これらの各々について「回答への確信度」もスケールをチェックする形で回答してもらうように設定し、1 を「全く自信がない」、5 を「間違いないと思う」という 5 段階尺度で回答してもらった。また、読解の容易さの指標として、課題を読み返した回数の質問を追加したが、これについては 1 を「一度も読

み返さなかった」、4 を「三回以上読み返した」の 4 段階尺度で回答してもらった。

場面想定法は、相澤(2011)の研究を参考に、「不安が起りやすいと推測される場面」と「怒りが起りやすいと推測される場面」を 8 場面設定し、予備調査の結果に基づいて本調査に適している場面を選択することにした。質問項目は「行為者が意図的に行動したと思う強さ」、「行為者が無意図的に行動したと思う強さ」、「行為に対する怒りの強さ」、「行為に対する不安の強さ」の 4 項目それぞれ 1 を「全く思わない」、5 を「絶対にそう思う」の 5 段階尺度で評価を行ってもらった。

予備調査を行うにあたり、大学の研究倫理委員会の審査を受け、許可が出てから質問紙を配布した。また調査は強制でなく、拒否する権利がある事を紙面に記載し、封筒に質問紙を入れて配布・回収し個人情報漏れることがないようにしてから調査協力を依頼した。

予備調査の結果、ToM 形式課題は 3 課題まで減らし、課題 1 を「女の子課題(周辺人物が二人組の女の子)」、課題 2 を「高齢者課題(周辺人物が高齢者の夫婦)」、課題 3 を「同世代課題(周辺人物が中心人物と同世代のカップル)」とし、保育園での実習中の経験など、回答者個人の経験の有無に影響されやすい課題内容は除外した。再読回数に関しては、四段階尺度から、1 を「一度も読み返さなかった」、5 を「4 回以上読み返した」とする五段階尺度に変更し評価してもらった。場面想定法については、場面ごとに個人の状況や経験が感情に影響しやすいと考えられる一部の場面を除外し、おおむね誰もが経験したことがあると推測される、もしくは今後経験しやすいと思われる 4 場面を本調査では使用することにした。また質問項目については「他者の意図推測」を「わざとだと思(意図的)」、「わざとではない(無意図的)」、「判断できない」の 3 択から選択する回答方法に変更した。

本調査

予備調査に基づいて、ToM 形式課題を 3、場面想定法を 4 場面に減らし、回答尺度や選択視の数など、一部改変した質問紙を用いて調査を行った。また、子安・西垣・服部(1998)が Perner & Wimmer(1985)を基にした二次誤信念課題「アイスクリーム課題」を、現在でも移動販売としてあり得るだろうもの(移動カフェでのコーヒー販売)に変更し、登場人物や説明文も青年期以降の発達に見合うように漢字を使用するなどの変更を加えた課題を質問紙に加えた。この課題を加えた理由は青年期後期であれば通過可能であろう従来の ToM 課題を通過できることを確認するためである。

調査対象者 大学 1 年生 87 名(男 26 名, 女 60 名)と大学 3 年生 59 名(男 20 名, 女 39 名)の合計 146 名(男 46 名, 女 99 名)であった。いずれも心理学関連の講義を受講している学生を対象とした。

有効回答者数 1 年生 69 名(男 21 名, 女 48 名)と 3 年生 44 名(男 14 名, 女 30 名)の合計 113 名(男 35 名, 女 78 名)を有効回答者とした。回答不備の基準は以下のように設定された。:(a)回答が質問と無関係または意味不明な記述である:(b)自由記述がないのに確信度が 1 より大きい:(c)一部であっても確信度が記入されていない:(d)自由記述はあるが確信度がない:(e)確信度が読み取れない:(f)一部もしくは全て回答がなされていない。なお、回答不備の男女差については大きな偏りは見られなかつ

た。

調査方法 心理学関連の講義中に研究の目的を説明した後に質問紙を一斉に配布し、その場で回収を行った。

インフォームド・コンセント 質問紙への調査協力は強制でない事、拒否した結果協力者に不利益はない事、個人情報には研究者および担当指導教員以外は閲覧しないことなどを記述しておき、口頭でも説明を加え、調査に同意される場合は同意にチェックを入れてもらい、同意されない場合はその場で他の調査者の回答が終わるまで待機をしてもらった。大学の倫理委員会の審査を受け、許可されている。

結果

他者の内面推測に関する確信のしやすさ(確信特性)

ToM形式内面推測課題の自由記述(カテゴリ分類) 中心人物と周辺人物の自由記述のカテゴリ設定を行った。カテゴリは感情に関するカテゴリ(「ポジティブ」、「ネガティブ」)と環境要因に関するカテゴリ(「疑問」、「人的関心」、「物的関心」、「異性関係」、「その他」:以下状況関心カテゴリと呼ぶ)を設定した。「ポジティブ」「ネガティブ」は感情の記述、「疑問」は行動への興味・関心に関する記述、「人的関心」「物的関心」「異性関係」は内面推測を行う際の情報に関する記述として区別し、一つの記述に対し単一のカテゴリに分類するのではなく、複数の内容が含まれている記述は複数のカテゴリに分類するものとした。また「異性関係」に関しては課題3「同世代課題」のみ「人的関心」と区別された記述されていた内容が多かったため分類に加えた。

個人特性としての確信の持ちやすさ(因子分析) 個人特性としての確信の持ちやすさが測定できているかどうかについて ToM形式課題の中心人物と周辺人物の内面推測に対する因子分析を主成分分析法とプロマックス回転を用いて行った。その結果、どちらの内面推測確信度についても、固有値は成分1が1.8以上で他は1.0よりも小さく、1因子と判断し、また、どちらの確信度も3課題の全てで成分1に対する因子負荷量が0.7より大きいので、ToM形式課題の3課題の内面推測確信度の平均を“確信の持ちやすさ”に関する個人特性を表すと考えてよいと判断した。以後、確信特性とし、確信の持ちやすさに関する個人差の指標とする。

ToM形式課題間の確信度平均の相違(分散分析) ToM形式課題の課題間で内面推測確信度の集団平均に差があるかにつて3(課題1・2・3)×2(中心人物・周辺人物)のMANOVA(Pillaiのトレイ)で検定を行い、ToM形式課題間に有意差($F(2,111)=14.534, p=.001$)があり、課題1「女の子課題」が最も集団平均の確信度が高い傾向がみられた。中心人物内面推測確信度と周辺人物内面推測確信度に関する比較では中心人物内面推測確信度の方が高い傾向があり($F(1,112)=7.868, p=.006$)、課題×中心人物・周辺人物の内面推測確信度の交互作用も有意だった($F(2,111)=7.101, p=.001$)。単純主効果を見ると課題1は中心人物・周辺人物の内面推測確信度に有意差がないが、課題2と課題3では中心人物の内面推測確信度の方が高い傾向がみられた。

ToM形式課題の再読回数と確信特性の関係 ToM形式課題の再読回数と確信度の値とのクロス表を作成しFisherの直接法で検定を行った結果、中心人物の内面推測確信度と再読回数は全てのToM形式課題と無関係

($p>.10$)であった。周辺人物の内面推測確信度については中心人物の内面推測確信度同様に再読回数とは無関係であったが、課題3「同世代課題」はメモリ不足の関係上カイ2乗検定で判断し、有意ではなかった($p=.068$)。今回の調査では中心人物・周辺人物どちらの内面推測確信度も、文章理解の困難さではなく、内面推測そのものに関する確信の度合いを表すものとして良いと判断した。

場面想定における感情(怒り・不安)の個人差と確信の持ちやすさ(他者の内面推測にかかる確信特性の個人差)の関係

場面想定法で出来事が提示され、その時回答者はどの程度怒りあるいは不安を感じるかという質問への回答について、次の3変数からの影響を分析した。(a)ToM形式課題中心人物・周辺人物の内面推測への確信の持ちやすさ(中心人物確信特性・周辺人物確信特性) (b)確信度の3課題間の標準偏差(確信特性の一貫性) (c)性別。(b)の標準偏差も加えたのは、一貫して同じ確信度を答えた人と確信度のバラつきが大きい人では確信度平均の意味が若干異なる可能性があるためである。つまりこのバラつきの有無が、場面想定における怒りなどの出方に影響している可能性、あるいはこれが確信特性(平均値)の影響を検出しにくくする可能性を考慮して、説明変数として分析に投入した。

3つの関係をWest, Aiken, & Krull(1996)の方法を用いて検討を行ったが、確信の個人特性については中心人物確信特性と周辺人物確信特性別々に検討を行った。West, et al.(1996)の方法を用いた理由は、調査対象差の男女差があり、この検定方法は男女のようなカテゴリ変数の影響を、他の変数との交互作用まで検討できる検定方法であるため、今回の検定に適していると判断し使用した。

怒り・不安と中心人物確信特性について 場面想定法「アルバイト場面」の怒り・不安への中心人物確信特性からの影響については、不安どちらも中心人物確信特性×性別が有意となった。男性は「アルバイト場面」では中心人物確信特性が高い人ほど怒り・不安どちらも高くなりやすい傾向がある。つまり、観察者視点での他者の内心推測に自信が強い男性は、自分に対して向けられた不快行動(当事者視点のストーリー)について怒りや不安を感じやすい。一方女性は単純傾斜が有意ではなかったため、中心人物確信特性は怒り・不安に影響を与えていないと考えられる。

場面想定法「衝突場面」の怒りについては、中心人物確信特性×性別の ΔR^2 が10%レンジで有意ではないが、男性の場合単純傾斜が正の値であって、アルバイト場面と同様のグラフになっており、中心人物確信度が怒りの感じやすさに影響している可能性も考えられるので再検討は必要と思われる。不安については性別との交互作用が有意であった。ただし、単純傾斜は男女とも有意ではない。単純傾斜の検定は交互作用よりも検定力が低いためだと考えられる。男性の標準化単純傾斜が正の値で絶対値が大きく、女性は負だが絶対値は小さいので、他の場面と同様に、男性は確信特性が高いと不安が生じやすく、女性にはその傾向がないと解釈してよいと思われる。

場面想定法「年下場面」での怒りの感情は中心人物確信特性と性別との交互作用が有意であり、また男性の単純傾斜も有意で、男性は中心人物確信特性が高い人ほど怒りを感じやすい傾向があり、女性にはその傾向がなかった。他方、不安は交互作用が有意ではなかった。

場面想定法「バス場面」では、怒り・不安共に性別×中心人物確信特性が有意であり、男性では、どちらの感情でも単純傾斜が有意であったが女性は有意ではなかった。男性は、中心人物確信特性が高い人ほど怒りや不安を感じやすい傾向があるが、女性についてはこの傾向はない。

怒り・不安と周辺人物確信特性について 場面想定法「アルバイト場面」の怒り・不安共に性別×周辺人物確信特性の交互作用が有意となった。男性では怒りの場合は単純傾斜が有意、不安については有意ではないが、10%レンジであった。少なくとも怒りについては、男性の傾向は他の場面と同様である。他方、女性の場合、怒りは単純傾斜が有意ではなかったが不安は有意な負の値となった。このことから、女性は周辺人物確信特性が低い人の方が、不安を強く感じるという結果になった。

場面想定法「衝突場面」については、周辺人物確信特性×性別について、怒りは ΔR^2 が有意ではなく、不安については有意となった。不安については、交互作用は有意でも単純傾斜がどちらの性も有意ではなかったが、男性の傾斜の絶対値の方が大きく正の値であり、他の場面と同様の傾向と考えて良いであろう。

場面想定法「年下場面」の怒り・不安と周辺人物確信特性の交互作用について、怒りは性別×周辺人物確信特性が有意となり、不安は ΔR^2 が有意ではなかった。他の場面と同様に、男性は確信特性が高いと怒りを感じやすいが、女性の場合はそうではない。不安については、これらの傾向は有意ではなかった。

場面想定法「バス場面」について、怒り・不安共に性別×周辺人物確信特性が有意となった。男性の場合、どちらの感情でも単純傾斜が有意出会ったが、女性の場合について怒りは単純傾斜が有意ではなく、他の場面と同様であった。ただし、不安は負の値で単純傾斜が有意であり、アルバイト場面と同様に、女性は周辺人物確信特性が低い人の方が、不安を強く感じるという結果になった。

意図の推測と感情

場面想定法で自分に対して他者からある行為をなされた時、自分(回答者)は怒りまたは不安をどのくらい感じるかを回答してもらい、他者の行為が意図的だと思うかそうでないか、また判断できないかも回答してもらった。意図推測と怒りまたは不安の感情について次の二つの変数からの影響を分析した。(a)性別：(b)意図推測(無意図的・判断不可・意図的)

上記の二つの関係について、性別は男性0、女性を1とするダミー変数とし、意図推測はWest, et al.,(1996)に従って二つのダミー変数によってコード化された；“無意図的”のダミー変数(0,1)と“意図的”のダミー変数(0,1)の二つとし、両方が0であることが“判断不可”を表す。検定はWest, et al.,(1996)の方法で行った。

場面想定法「アルバイト場面」について、怒りについては意図的との関係が有意となり、不安は有意なものがみられなかった。性別との交互作用は見られなかった。

場面想定法「衝突場面」は怒り・不安共に意図推測と関係がみられず、性別との交互作用も有意ではなかった。ただし、怒りでは10%レンジであり、意図的の係数は5%レベルであること、さらに不安では性別との交互作用(ΔR^2)が10%であったため、さらに検討することが必要と思われる。

場面想定法「年下場面」では、怒りの強さと意図推測の関係は有意と

なり、“意図的”と判断した場合怒りを強く感じやすい傾向がみられ、男女差はみられなかった。不安については、 R^2 が有意ではなかったが性別の係数が有意だったため、この場面においての男性は不安を感じやすい可能性をさらに検討する必要があると思われる。

場面想定法「バス場面」での怒りは意図推測との関係が有意であり、“意図的”と判断した場合怒りを強く感じやすい傾向が男女ともにある。不安も同様に意図推測との関係が有意であり、“意図的”および“無意図的”どちらの判断も不安が強くなりやすい傾向が男女ともにみられる。

ToM 形式課題中心人物・周辺人物確信特性と場面想定法と推測不明の関係

場面想定法では自分に対して他者からある行為をなされたとき、自分(回答者)は怒り、または不安をどのくらい感じるか以外に他者の行為の意図推測も回答してもらった。この意図推測が出来ないという回答は、行為者の意図に関する確信がゼロまたはその周辺であることを示唆している。そこで場面想定法での“判断できない”とToM形式課題で測定された確信特性との関係をWest, et al.,(1966)の方法を用いて検討を行った。分析の結果、ToM形式課題の中心人物・周辺人物確信特性と場面想定法で用いた4場面の意図推測が“判断できない”とした意図推測とはいずれも有意な関係がみられなかった。観察者視点と当事者視点などの相違があり、確信特性は他者理解一般に係る確信度と考えられるが、場面想定法では特定場面で自分に向けられた不快行動に対するものだけということによるのであろう。

内面推測カテゴリと確信度

ToM形式課題の中心人物・周辺人物の内面推測についてカテゴリ分けを行い、カテゴリと個人特性としてのToM形式課題の確信度の関係性についてWest, et al.,(1966)の方法を用いて検討を行った。検討の結果、ToM形式課題「高齢者課題」の状況関心カテゴリと中心人物確信特性以外は有意なものがみられなかった。

考察とまとめ

従来のToM課題の正答率に関する議論の中では、発達障害との関連以外に言語能力との関連についても述べられており(藤野ら, 2016)、言語能力と課題正答率との関連が注目されている。おおむね10歳から11歳レベルの語彙理解力を有するとほぼすべての誤信念課題を通過できる傾向が英国・日本共にみられていることが述べられ(藤野・松井・東條・長内, 2015)、二次誤信念課題を通過するには一定の言語能力の発達が必要とされている。しかし、今回の回答者においてはToM形式課題の再読回数と個々の課題での「中心人物確信度」・「周辺人物確信度」は全てのToM形式課題において無関係であった。このことからToM課題を理解し他者の意図・心情を推測するには文章の読解力などの言語能力が必要と思われるが、少なくとも今回使用した文章を大学生が読む場合、再読を繰り返しても登場人物の内面推測に対する確信とは無関係であることが分かった。また因子分析によると確信度の高低個人差には一貫性がある。したがって、各個人の課題間平均はその人の確信の持ちやすさ、つまり個人特性を表わすものと判断してよいであろう。さらに、内面推測の内容と

確信度の間に関連がないことも踏まえて個人特性としての確信の持ちやすさと、不快行為に対する当事者としてのネガティブ感情の関係についての結果を図に表すと、一部有意でない場合があるとはいえ、総合的に見て図1・2のようになると考えられる。



図1 男性の対人場面で生じる感情の強さの過程

男性の場合、対人場面で生じるネガティブ感情(怒り・不安)の強さには相手の意図推測だけではなく、普段の他者理解力に関する自信の強さ(確信特性の高さ)も影響している可能性が考えられる。ただし、今回の結果だけでは他者理解に関する強い自信が直接的にネガティブ感情の出現に影響しているのか、元々怒りやすい人が他者理解に関する自信が強くなりやすいのかについては不明である。男性の場合、他者理解の内容が一般的な他者が考える他者理解の内容と大きく外れており、かつ確信特性が高いという場合は怒りや不安のポイントを周囲が理解することが難しい可能性があるだろう。一方で、他者理解の内容が一般的な他者が考える他者理解の内容と大きく外れていないが、確信特性が低いというに他者の行動の意図推測もできない場合だと感情が弱くなりやすく、本人にとって不利益な対応や結果を生じてしまう危険性もあるかもしれない。



図2 女性の対人場面で生じる感情の強さの過程

男性とは違い、女性の場合は対人場面で生じる感情の強さに対して、意図の推測は感情と関係性がみられたが対人関係に対する確信特性は直接影響していない可能性がある。このような結果になっている可能性として考えられる要因は、女性はある意味では男性より、その場の状況や他者に対して様々な可能性を考慮して判断しようとしているのかもしれない。

男女ともに他者理解の内容は感情の強さには影響しないという結果からどのような他者理解であっても、本人の対人関係における他者理解の自信の強さには関係が見られないことが分かり、自信過剰や過少の場合もあると考えられる。また前述したように男性においては、他者理解の内容と本人の確信特性によっては対人関係において困難を生じてしまう可能性があると考えられる。

応用可能性

「認知行動療法(Cognitive behavioral therapy:以下 CBT)」との関係

他者の内面推測に対する確信特性の高さが感情に影響しているのであれば、ある困難が生じた場面で行った行動について、その瞬間に感じていた感情や考えが妥当なものかを振り返り、自分自身の考えや認知の特徴を学ぶことで、ある場面で生じる困難を解消する新しい心理療法である(大野, 2011.; 古川, 2010.; スティーブン・A・サフレン, キャロル・A・パールマン, スーザン・スピリッチ, マイケル・W, 2011)。近年うつ病などの治療を中心に注目されている CBT だが、この療法を使用する場合は個人の確信特性について検討する必要があるのではないだろうか。特にクライアントが男性であった場合、確信特性とネガティブ感情との関係が強いため、他の認知の方が妥当であるという可能性を考えにくくなり感情・行動の変化に結びつきにくいために日常生活での困難さを解消できないケースも一部にはあるという事が考えられる。

支援との関係 確信特性が非常に高いが、他者理解の内容が多く他の他者の理解内容とずれやすい傾向があるクライアントが、自身が保持している能力より難しい行動や活動を行うようなケースでは、支援者はクライアントの行動を制止もしくは中止するように促すかもしれない。その際に男性クライアントの場合、図1で示したような関係性があるとすれば支援者のラポールが十分に形成出来ていないとクライアントとの衝突やずれ違いが生じ、最悪の場合クライアントからの支援拒否に繋がる可能性があると思われる。このようなケースの時に「クライアントは自分自身の行動に対する確信が強い、つまり自信がある」と理解することでクライアントとの衝突について「自分の特性を理解していない」ことについての認知修正よりも、「現状で表現可能な活動を探す」という方針に転換しやすくなるかもしれない。また、支援者も自身の精神的負担を軽減することに繋がる可能性がある。

「大人の発達障害」の診断について 臨床・診断場面において「大人の発達障害」や高機能 ASD の傾向が高いと予想された場合、おおよその目安として児童を対象とした ToM 課題を使用しているケースは多いかもしれない。現在、大人の発達障害もしくは高機能自閉症スペクトラムを対象とした新たな ToM 課題が研究されてきているが、まだ研究数自体は少ないようである(椿田, 2006)。しかし、「確信特性」(自信過剰・過少)が他者の行為への感情反応に影響を及ぼしているならば、ToM 課題に正答できるために問題ないと判断されてきた場合であっても、日常生活場面では発達障害の特性を示すケースが存在する可能性がある。逆に「確信特性が低すぎる」為に、本来正答できる ToM 課題に失敗したために適切な診断を受けることが出来ないこともあり得るかもしれない。どのような場合であっても、検査者が ToM 課題を使用する場合は様々な要因を考慮し、検査報告がクライアント・支援者・家族にとって十分納得がいく診断の一助になれるように努める必要があると思われる。

謝辞

この梗概に概要を述べた研究を、修士論文として形にすることが出来たのは、担当して頂いた妻藤真彦教授の熱心なご指導や、美作大学児童学科の学生の皆様が貴重な時間を割いて調査に協力していただいたおかげです。協力していただいた皆様へ心から感謝の気持ちと御礼を申し上げます。謝辞にかえさせていただきます。

引用文献

- 相澤直樹(2011) 意図の不明確な対人挑発場面と対人疎外場面の作成に関する予備的研究 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要、4:117-122
- 相澤直樹(2014) 対人恐怖における認知の偏りの内容特定性について：敵意帰属との関連から 神戸大学大学院人間発達環境学研究所研究紀要、8:103-106
- Baron-Cohen, S., Leslie, M., & Frith, U. (1985) Does the autistic child have a 'theory of mind'? *Cognition*, 21:37-46
- Bosacki, S. L. (2000). Theory of mind and self-concept in preadolescents: Links with gender and language. *Journal of Educational Psychology*, 92:709-717.
- 藤野博・森脇愛子・神井享子・渡邊真理子・椎木俊英(2013) 学齢期の定型発達児と高機能自閉症スペクトラム障害児における心の理論の発達:アニメーション版心の理論課題 ver.2 を用いて 東京学芸大学紀要 総合教育学系 II 64:151-164
- 藤野博・神井享子・松井智子・東條吉邦・計野浩一郎(2016) 自閉スペクトラム症児における心の理論と語彙理解およびプランニングの関係 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 67:223-233
- 藤野博・松井智子・東條吉邦・長内博雄(2015) 学齢期の高機能自閉症スペクトラム障害児における心の理論と語彙理解力 東京学芸大学紀要 総合教育科学系 66:311-318
- 古川壽亮(2010) 認知行動療法トレーニングブック 統合失調症・双極性障害・難治性うつ病編 医学書院
- 子安増生・西垣順子・服部敬子(1998) 絵本形式による児童期の<心の理論>の調査 京都大学教育学部紀要 44:1-23
- 新田慈子(2016) 介護者から認知機能低下を認識されにくい高齢者への心の理論課題の測定方法の検討 生老病死の行動科学 20:37-74
- 大野裕(2011) はじめての認知療法 株式会社講談社
- Perner, J. & Wimmer, H.(1985) "John thinks that Mary thinks that ..." Attribute of second-order beliefs by 5-to 10-year-old children. *Journal of Experimental Child Psychology*, 39:437-471
- Premack, D., & Woodruff, G., (1978) Does the chimpanzee have a theory of mind? *The Behavioral and Brain Sciences*, 4:515-526
- 妻藤真彦(2010) 確信度評定過程に関するサンプリング理論の比較：繰り返し質問における回答と確信度の変化 美作大学・美作大学短期大学部紀要 55:49-57
- 妻藤真彦(2014) 尺度評定対象情報と評定情報処理:2 値情報の内的サンプリングによる量化仮説 美作大学・美作大学短期大学部紀要 59:7-15
- スティーブン・A・サフレン キャロル・A・パールマン スーザン・スピリッチ マイケル・W 訳坂野雄二(2011) 大人の ADHD の認知行動療法セラピストガイド 日本評論社
- Schlenker, B. R. & Leary, M. R. (1982) Social anxiety and self-presentation: A conceptualization and model. *Psychological Bulletin*, 92, 641-669
- 椿田貴史(2006) "社会的失言(faux pas)" 検出課題と自閉症スペクトラム指数の臨床的適用に関する考察—二つのアセスメント事例から— *NUCB Journal of Economics and Information Science* 50:87-96
- 辻弘美・山崎綾香・藤原はづき(2016) 心の理論インタビューの青年期後期から成人期の日本人女性への応用—心の理論インタビューでどこまで他者の心的状態理解が測定できるのか— 大阪樟蔭女子大学研究紀要 6:13-19
- West, S.G., Aiken, L.S., and Krull, J.L. (1996) Experimental personality designs: analyzing categorical by continuous variable interactions. *Journal of Personality*, 64:1-48